# ともだち（男）ホステス１６さい

ルリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ともだち（男）ホステス１６さい

【Ｎコード】
Ｎ４２６５Ｃ

【作者名】
ルリ

【あらすじ】
おれ、普通の高校男児はダチが事情ありでホステスやってます。そして、そいつんちに遊びに行き、そのあとその店行ったあとで、それ（ホステス）がらみで俺もなぜかまきこまれてしまって……

# 友達のひみつ

序章

俺、高校1年長谷川（はせがわ）　青汰（せいた）は、少しヤバイやつを友にもってしまった。

本人にもいろいろ事情はあるけど、クラスメイトにばれたらどうするわけだ、あいつは。

第1話

私立柳沢学園　偏差値７０　進学最優先　有名大学進学者多数

「青汰、今日僕んちよってかない？」

高校から知り合った曽根崎（そねざき）れん。天然のうすい色素の髪に青い目でハーフ。よく女と間違われている。

背は１６７ｃｍ

「別にいいけど」

れんは微笑みながらいった。

「もう少し愛想よくしたほうが良いんじゃない。顔立ちは悪くないんだし、無愛想なところ直

したら

女子からもてると思うよ」

ほっとけ、心の中でつぶやいた。

れんと歩きながら帰るのは初めてだ。

周りには新しい住宅がならんでいる。

曽根崎はとうとつに俺のほうを向いた。

「ぼく、バイトやってるんだ。そこさ、ぼくの姉さんがボスっぽいものなんだ」

「姉貴がボスってすげーな、俺もバイトやろーかな・・・で、どんなバイト？」

こいつなら顔かわいーし、愛想いいしで上手くいってんだろーな。

「ホステス」

「ふーんホステスねえ・・・ってホステスぅ！！」

「女装しなくちゃいけないけど、けっこう楽しいよ」

俺は頭が真っ青になった。ホステスってあれだよな、ゲイバーではなくて女の、でもこいつ男

だし。

曽根崎はおれの袖口(そでぐち)を軽くひっぱった。

「でも、別に女装の趣味があるっていうわけじゃないからね。ねえさんが経営してるから。

ほら、ぼくって、両親小さいときになくなったし、

私立の高校いってるしで、それになぜか大学も私立にしなさいって、姉さんが言ってて。」

「いやって、いや良いのに。」

「姉さんには迷惑かけっぱなしだったしね。こんな時ぐらい、お願いきいてあげたいから」

でも、ホステスで働かせる姉貴ってどうなんだろう。

俺だったら頑固としてことわるな。どんだけお願いされても。

「ぼくの家、行ったついでに今日泊まってく?」

「いや、泊まってもいいけどさ、おまえ夜は・・・」

さすがの俺もことばに出すのが恐ろしい。

「べつに良いよ、バイト、見てっても」

こいつ平気なのかな、そんな姿ダチにみせんの。

「はじめてなんだ。友達いえにいれるの。それに、青汰だったらそんなことで

冷やかさないだろうし。」

あいつはうれしそうに笑ってた。家にダチいれたことなかったんだ。

まあ、そりゃ

そうだよな。そんなことやってたら。

ということで、おれは曽根崎んちへ行くことになった。まあ、これから行かなきゃ良かったっ

て後悔すんだけど。

## ―れん―（前書き）

前話までのあらすじ。
おれはダチ（男）のれんがホステスをやっているのを知ってしまった。そして家に泊まってみせによってかないといわれ……

**―れん―**

「ついたよ」

団地じゃないけど家がつらなってる所に曽根崎（そねざき）の家があった。けっこう普通の

家。赤い屋根で庭付きの、

どっちかっていうと女が喜びそうな感じ。

玄関には葉の表面にワックスをかけたような観葉植物。

「ここ曲がったらリビングだから」

家の中はけっこうこぎれいに整理されていた。整理、だれがすんのかな。

リビングにはいると、中学1，2年ぐらいの少年がいた。

「兄貴、おかえりー」

「今日、練習は？」

「あるよ。7時から」

牛乳パックでそのまま飲んでいた。手には黒色のリストバンド。

髪はある程度みじかくカットされており、スポーツマンタイプ。

日焼けは、あんまりしていないけどしている。『いってきます』といって出て行った。

曽根崎（そねざき）　葵（あおい）中1らしい

「似てないよな、おまえら……」

「そうかな。むかしはよく似ていたんだけど。顔ってかわるものだね」

そのあと、夜7時半ぐらいまではCD聴いたりまんが読んだりしゃべったりして

だらだら過ごしていた。

れんは時計をみて、イヤホンを素早くはずした。

「青汰。ぼく、そろそろ店にいくね。」

「あれってウソじゃないよな。」

「本当だけど、おどろかすのにぴったりのネタだよね。」

微笑（ほほえ）みと一緒におくりだされる言葉。

信じられねえ……やっぱ。ていうかプライドは?！

「ぼくは着替えてくるけど、青汰はこのまま家にいる?」

優柔不断ではないはずなのに答えられない。
あいつは別の部屋に移動した。

１０分後

「おまたせ。」

「……」

目玉はあいつをずっと凝視している。
声がでないくらいの衝撃がはしった。

「い、いつもこんな感じなのか？」

「大概はね。服とか髪とかは店でセットするよ。」

くちびるには赤色のリップクリーム。つめは透明な白色で
銀色の花がネイルアートであらわされている。
ロングヘアーの赤茶色のかつらに軽いパーマをかけられている。
でている雰囲気はまさに、女の中の女。
手は以外に男っぽいというだけで済まされるだろう。
なんか、さすがの俺も好奇心がわいてきた。

「ついてくる？」

「まあ、おまえが良いんなら行く」

「一応歩くから、これかぶってね」

手渡されたのはサングラスに茶髪（ちゃぱつ）の馬の尻尾ヘアー（名前を忘れた）のかつら。

行くか、夜のまちへ

このあとのトラブルをおれはまだ知らない。

## 夜

薄暗い町を、あいつと俺は歩いていく。あいつはいはば女装で、おれは茶髪の

ポニーテールのウィッグ（かつら）。

しかもそれが肩以上ある。黒色のサングラスをかけ、

水色のカッターシャツに黒のスーツ姿。こんな格好ぜったい誰にもみせたくない。恥ずかしすぎる。

どうみても俺らって、女と男だよな……

しばらく行くとネオンがぎらぎらに光っている場所に行き着いてくる。

もう夜の街っていうのは言われなくても、はだで感じる。

「ここだよ、この『ＨＩＳＵＫＡ』ってかいてある店」

けっこうその建物は大きい。姉貴がボスって、どんなやつだ？

文字は金色で思いっきり点滅している。

「青汰。念のために裏から入ったほうがいいよね。お客と間違われるかもしれないし。姉さんにはぼくから言っとくよ。たぶん、怒らないと思うよ」

「わかった。姉貴以外にお前が男だって知ってる人いんの？」

「いないよ。いたとしても何か手段をつかって、ねじ伏せちゃうかもね。」

笑ってるけど真剣（マジ）に言ってるのが恐い。

裏の右らへん。おれはそこでしばらく立ち尽くしていた。

裏からって言われても入りづらい。そういうふうにしていると、俺のうしろからラベンダーの香りがほのかにただよってきた。

「名前は青汰か？」
名前を呼ばれた瞬間、心臓がとまりそうになった。
こんな所でいきなり声をかけられ、驚くなというほうが無理だ。
「心配しなくてもいい。私はれんの姉だ。」
「曽根崎の姉さん？」
「そうだ。あいつから話はきいた。ついてこい。案内する。」
俺の想像した姉貴とは全然ちがうタイプだった。黒髪に肩ぐらいまである
ストレートヘア。切れ長めのビー玉のような瞳。もうちょっと弾けた姉を
想像していた。でも、弟をこんなほうで働かせてるんだよな…

店の客とかいる部分にはたくさんの女がいた。（当たり前だけど）
俺は
隅っこぐらいに見つかんないように。幸いなぜか、だれも声をかけない。
おれは辺りをきょろきょろ見回した。（いたっ！！）３０歳代後半の男の接待を
している、れん。

「いやー弥生（やよい）ちゃんて、本当にかわいいよねー！！」
「ありがとうございます。そういうおじさまこそしぶくてかっこいいですよね。」
うわ～。女やってる。ていうかここでは弥生だったのか。髪には優雅な蝶の飾り物。

しばらくそんなやり取りを、見ていたら客が帰り際れんにキスをし

た。
まあ、客はれんのこと女と思ってるしなー。俺だったらキスされた瞬間殴りたおす。

見ているこっちとしては、すごく痛い。何人目かのお客の相手をした後、れんはこっちに近づいてきた。
「青汰。ぼく、そろそろあがりなんだ。帰ろう。」
「お前、大変だな……」
「周りにばれた方が大変だと、思うよ。」
そういって少しわらった。

そのころ、お客の中に
「我が高校の１年、れん君と青汰君じゃないですか。
だめな子達ですね、こんなところにいるとは」
そうつぶやく男が一人いた。２０代前半ぐらいの男だった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4265c/

---

ともだち（男）ホステス１６さい

2010年10月10日18時01分発行